
バカと狼と半額弁当

郭靖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと狼と半額弁当

【Nコード】

N3961Y

【作者名】

郭靖

【あらすじ】

僕、吉井明久はたまには贅沢しようと、スーパー太丸で半額弁当と買おうとしたら、倒れていた。

この出来事が僕の運命を変えた瞬間だったのだった。ハーフプライサー同好会の部員達。

《絶対零度の女王》、木下優子。《銀色の紳士》ミスター・スプーン、須川亮。

僕はこのバカ達と共に半額弁当を得るために戦い続けるのであった。

激情する焼肉弁当 867kcal

たまには贅沢しようと、スーパーに寄ったら、気付いたら、気絶していた。

いや、僕も意味が分からない。ただ覚えている事は、あの半額弁当を取ろうとした瞬間、無数の攻撃を浴びた。

そして薄れゆく意識中で、唯一聞こえた言葉が一つ。それは『豚』。それだけだった。

それと綺麗な女の人の生足が見えたような気がする。……いや、生足だけじゃない！思い出せ、吉井明久！お前は生足だけでは無く、パンティーも見えたはずだ！燃えろ……僕の記憶……僕の欲情！

「はっ！見えた！黒だ！」

「いきなりなに言ってるんだよ、坊主。それより大丈夫か？」

へ？ここは……何処だ？目の前には、難いといい男性、そして僕はパンツ一丁……。

成る程……僕は……。

「もうお婿に行けない！」

「なに言ってるんだ、糞坊主」

「あんた！気絶している僕の後ろの穴の処女を「俺にその毛は無いわ！」え？それじゃ、なんで僕は……」

「……お前、何も覚えてないのか？」

何も覚えてない？そりゃ、綺麗な女の人のパンティーが黒だったり、そんな事は覚えてるけど、それ以外の事は何も覚えてないな……。

「……その顔からして、何も覚えてないな。だったら、忠告だ。これから、このスーパで弁当を買うときは半額弁当は狙うんじゃない。素直に半額前の弁当を買うことだな」

「へ？なんで？」

「……古くは《騎士》、現在は《狼》と呼ばれている者達の狩場だからな、ココは。それにココは《絶対零度の女王》の縄張りだからな。それ以上、傷を増やしたくなければ、半額弁当は狙わないことだ。それと、そのダンボールの中にカロリーメイトの苺味が入ってる。それをやるから、帰りな」

「マジで！？ありがとうございます！ホモおじさん！」

「俺はホモじゃねえ！」

ダンボールは……これか。ホントに中にカロリーメイトが入ってた。よしっ！これで一週間分の栄養になるぞ！

そして服を着て、軽くおじさんに挨拶して、用務員室から出る。……ついでに何か飲み物でも買ってこうかな？うん、そうしよう。たまには豪華にしないとね。

「ん？あれは……」

飲み物を手に取ると、店の外に誰かが見えた。綺麗な茶髪を靡かせ、僕の事をじっとみている。僕はその娘に覚えがある。……誰だっけな？何処かで見た気がするんだけど……。

あ、もう何処かに行っちゃったや。仕方ない、今日はもう帰ろう。そして次の日。

「おはよ、姫路さん」

「おはようございます、吉井君」

僕はクラスメイトの姫路さんと学校に向かっていった。今日は昨日、

カロリーメイトとコーラを食べたせいか、頗る調子がいい。
今なら、鉄人でも倒せそうな気がする。

「よっ、今日は早いな。明日は雨でも降るか？」

「なんだよ、雄二！僕だってたまには早く起きるぞ！」

僕に話し掛けてきたのは、悪友である坂本雄二。難いのいい体つきで、目付きが悪い。全く、成績優秀、授業態度もいい僕とは大違いだ。

「明久、お前今、失礼な事を考えてなかったか？」

「そんなこと、考えてないよ」

全く……失礼な奴だな。ホントのことを考えてただけなのに。そんな感じに姫路さんと雄二と話していると学園に着いた。文月学園、試験召喚システムでのを導入してる学園なんだけど、今は関係ないから省略させてもらう。

「おはよ、秀よ……あれ？」

大きいゴミ袋を二つ抱えてる後ろ姿を見て、僕のクラスメイトの木下秀吉だと思ったけど、何かが違う。何て言うか、秀吉のような、秀吉じゃないような……。

「ごめん、雄二、姫路さん、先に行ってる」

「へ？よ、吉井君？どう言う意味です」

どうしても、あの人の事が気になった僕は姫路さんの言葉を最後まで聞かず、ゴミ袋を抱えてる子の目の前に来た。

その娘は秀吉そっくりだけど、秀吉じゃない。確か、秀吉のお姉

さんの木下優子さんだっけ？

「何よ、あんた」

「いや、なんか君のことが、どうしても気になって……」

「そう、ならゴミ袋を一つ持ってくれない？結構、辛いだよ」

「うん、いいけど……」

そう言って、木下さんは僕にゴミ袋を一つ渡す。ゴミ袋の中には、大量のカラのコンビニやスーパーで売ってる弁当入れが棄てられてた。これ、全部、木下さん一人で食べたのかな？

「ねえ、木下さん。このゴミはいつたい……」

「見て分らないの？弁当のゴミよ、ゴミ」

「いや、そうじゃなくて、なんでこんなにゴミあるの？あ、それとさ、昨日、スーパー太丸にいた？……木下さん？」

気付いたら、もうゴミ捨て場に来ていた。そして周りには、何もいない。つまり、木下さんと二人きり。それにしても、僕が昨日のことを聞こうとして、スーパー太丸の名前を出したら、木下さんは怪しげに、それでいて色っぽく微笑んでいた。

なんだろう……この色っぽさは……！姫路さんとも、美波とも違う可愛さと美しさ……！ま、まさか恋？恋なのか！？

も、もしかして誘っているのか！？誘っちゃってるのか！？ま、まだ心の準備はすんでないのに……。くそっ！どうすればいいんだ！

「まあ見所はあるわね……。吉井君、昨日のこと、気になるなら、今日の夜九時にスーパー太丸に来なさい。昨日、起きたこと、なんで君が気絶していたのか、その理由を見せてあげるわ」

「へ？わ、分かりました」

「じゃ、待ってるわよ。それと半額神……半額シールを貼ってくれ

る店員さんが場を離れ、調理場に戻るまで、半額弁当に手を出さないこと」

そう言って、木下さんはこの場を離れた。昨日、僕に起こったこと、それは《豚》と呼ばれたことと、綺麗な女の人に蹴られ、パンティーが見えたことくらいしか……。……。今日の夜、いったい何があるんだ？……。仕方ない、教室に戻るか。

「おはよ、アキ。アキ？どうしたのよ。元気ないよ？」
「ん？いや、なんでもないよ。ただちよつと考え事」

僕に話し掛けてきたのは、島田美波。僕のクラスメイトで僕のことをよく殴ってくる女子だ。

「……………」
「大丈夫か？明久。お主が考え事など、頭でも打ったのか？」
「……………今なら間に合う。傷を見せろ」

僕を心配してくれるのは、木下さんの弟で、僕の親友の木下秀吉とムツツリーニこと、土屋康太。

ホントに何でもないのにな。どうして僕のことを心配するんだろう？……。まあ、いつか。

そして時間が経って、放課後、そしてかなり時間が経ち、八時五十分のスーパー太丸。そこに僕はいた。木下さんに来いって言われたけど、木下さんの姿は見当たらなかった。

そして難しいのいいあの店員が現れた。弁当に一枚、一枚、丁寧に貼っていく。そして最後の一枚を貼ると、売り場を離れていく。そして後ろを一瞬、こちらを振り向いて、差っていった。

次の瞬間、もの凄い騒音と何かを殴る音、それを防御する音。いったいなんなんだ！？振り向くと、それは《狼》達の戦いだった。

腹を空かした《狼》達が自身の腹を満たす為、戦っている。………あれは………激情する焼肉弁当！？いつもは530円と高額で食べられない存在………でも、今は………半額シールが貼ってあるから買える！………僕も戦いに参加するのか？この半額弁当を奪い合う戦いに………いや、戦わないわけにはいかない！戦わないといけないんだ！

「うおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

走る！戦いの経験の少ない僕が勝つには、一か八か、走って！走って！！そして走って！みんなが戦いに集中しているうちに半額弁当を奪い去る！

だけど、次の瞬間、筋肉隆々のオッサンに殴られる。そしてハゲのお兄さんに蹴りを入れられ、吹き飛ぶと、茶髪のふくよかで大変発達した胸を持つ女性に殴られ、その場に倒れた。

くそっ………僕は半額弁当を食べれないのか……。あの美味しそうな焼肉弁当を食べるためなら………死んだって！な、なんだ………あの人は………僕と同じ文月学園の制服………そして綺麗な茶髪………それにあの顔………木下さん？な、なんで……。それにあの戦い方………まるで戦い慣れているような戦い方は………！あそこあそこに道が見える！これなら………半額弁当を取れる！

「絶対に………！絶対にい！食べてみせ」

次の瞬間、木下さんの廻し蹴りが僕の顔面に当たった。そして僕は気付いてしまった。あの時、僕を蹴った女の人が木下さんだと、そして黒のパンティーだと思ってた物は、ただのスパッツだと。

「激情する焼肉弁当、いっただき♪」

「……………《絶対零度の女王》……………木下さんだったのか……………」

そう言い、僕は倒れた。

次に目を覚ますと、そこは公園だった。隣には、激情する焼肉弁当を口一杯頬張る木下さんの姿があった。

「あら？もう起きたの？」

「木下さん、なんでココに……」

「…………聞けど、あんたは《狼》の意味を知ってる？」

《狼》？…………確か、ホモおじさんが、《狼》とか言ってた気がするけど、僕はそれくらいしか、知らないな…………。

「…………そう知らないのね。だったら、今日の事は忘れなさい。貴方が知っていい世界じゃないわ」

「なんだよ、それ。僕だって、弁当を奪うくらい」

奪うくらい、その次を言おうとしたら、目の前に拳があった。それは間違はなく、木下さんの物。目で追いつけなかった…………。なんて速い右ストレート…………。

「目で追いつけなかったでしょ。今のが追いつけないなら、弁当を奪うなんて以っての外よ」

「ぐっ…………」

「そうね…………どうしても半額弁当を食べたいのなら、明日の七時に部室練の510号室に来なさい。《狼》の事を全て教えてあげる。ただし、来たら最後、後戻りは出来ないわよ」

そう言い、木下さんは去っていく…………。明日の七時、部室練の510号室に行けば全てが分かる…………。よしっ！やってやろうじゃないか！

好転するダイナミックカルボナーラ 1569 kcal

七時ピッタリに部室練510号室の目の前に僕、吉井明久はいた。途中、雨が降り始めて、制服が濡れてしまったが、関係ない。

昨日、木下さんに《狼》と呼ばれる奴らのことを教えてくれると言うので、僕は来てしまった。

あの時、僕は悔しかった。何も出来ないまま、半額弁当を奪われ、あの激情する焼肉弁当を心の底から食べたいと思ってしまった気持ちを裏切ってしまったのだ。

だからこそ、僕は知りたい。奴らは何なのか、そしてどうすれば半額弁当を食べれるのか知りたい！それが茨の道であろうと、《狼》の道であろうと！

「頼もう！」

勢いよく、扉を開けると、そこは………天国だった。

「何すんのよ！変態！」

「ぎゃあああああああ！！僕の目に信じられないくらい大量のタバスコがああああああ！！」

雨に濡れた制服を乾かしていた木下さんがいた。勿論、パンティーは履いてた。

だが、ブラはしていない。つまり、生のおっぱいを目撃してしまったのだ。まあ………生っぱいが見られたなら、目くらい潰された方がいいか。

数分後、木下さんは堂々と椅子に座り、僕は床で正座していた。

「……改めて聞くけど、覚悟はしたのよね。《狼》になる覚悟を」

「はい、勿論です。僕は二度と、あの気持ちを我慢したくない。あと少して届きそうなのに、届かなかった、あの……半額弁当を食べたいと言う気持ちを我慢したくないんだ！」

「……：よろしい。吉井君、貴方をハーフプライサー同好会の部員として認めるわ。まず《狼》についてと、幾つかの用語を教えてあげる」

「はいっ！ありがとうございます！」

「返事がよろしい。まずは私達、《狼》についてね。《狼》は初めはただの半額弁当を奪い合うだけの存在だったけど、いつの間にかルールを作って、それに従って、半額弁当を奪い合ってるわ。そのルールってのは、神（店員）が売場から消える前に駆けるなかれ。その夜に己が食す以上に狩るなかれ。狩猟者でなき者攻撃するなかれ。獲物を捕った物襲うなかれ。店に迷惑かけるなかれ。礼儀を持ちて誇りを懸けよ。まあ大体この辺ね。分からないことがあったら、言いなさい」

分からないこと……。相違や、なんで初めの日に僕はなんで殴られたんだ？一応、そのルールなら、狩猟者じゃない僕は狙われなかったはずだ。でもなんで僕は殴られたんだ？

「木下さん、それじゃあ半額シールが貼られて、その直後に半額弁当を手にとったら、どうなるんですか？」

「ああ、その事ね。それは後で説明するわ。まずは用語について説明する。私達の《狼》の他に、ルールを理解しているけど、腕がまだまだ未熟で最前線で戦えない《犬》。そしてココから吉井君が聞いた質問の答えであり、答えで無いもの……」

答えであり、答えで無いもの……。なんだか緊張しちゃうな……。だけど、僕には今の緊張よりも、緊張する物があった。なんて言うか……目のやり場に困る。うん、嬉しいよ。嬉しすぎるけど、いつばれるかと思うと、ドキドキする……。ホントにむちむちしてる木

下さんの太ももを見てると興奮してしまう…。

あれ？僕って太ももフェチだっけ？

「ちょっと話し聞いているの？」

「あ、ごめん、考え事してた…。」

しまった……。木下さんには悪い事したかな……。それにしても、なんてけしからん太ももだ。それと今分かったけど、僕は太ももフェチだ。

「もう、考え事はいいけど、こっちの話もよく聞きなさい。一昨日の吉井君がこの存在であり、それは《狼》達からも、叩き潰すことを許されてる存在……。《豚》よ」

「ぶ、《豚》……？」

「そ、《豚》。《豚》はルールなんて知ったこっちゃ無い。半額シールを貼られて間もない半額弁当に手を出したり、シールを貼られる前の弁当を買占め、半額神にシールを貼るように要求したり、必要以上の半額弁当を買い込んだりしてるのよ。ホント、豚みたいに食い意地張って、薄汚いたらありやしない」

……もしかして、木下さんは僕のこと、攻めてるのかな……。そりゃこうだよな。なにも知らなかったと言え、《豚》と同じ行為をしたんだもの。ああ、分かってくると、なんだか悪い事をした気がするな。

「さてと、話を続けるわよ。次に説明するのは、半額神。半額神は半額シールを貼ってくれる店員さんのことよ。半額神には色々なタイプがいて、手早くシールを貼る人、ゆっくりとシールを張る人、わざとシールを貼らないで《狼》を焦らせる人、中には店の儲けの為に絶対に値下げシールを貼らない人もいるわ。次は腹の虫の加護

についてよ」

「腹の虫の加護？」

腹の虫ってあれだよな。お腹がすいた時、なるヤツ。その腹の虫が加護だなんて、なんだか変だな。

「こらそこ！笑わない！腹の虫の加護は戦いにおいて、重要な事なのよ！腹の虫の加護は空腹感と弁当を食べたいという欲求によって普段よりも身体能力が上がることを言うわ。争奪戦においては体を鍛えているか、格闘技経験の有無などよりも加護の強さが勝敗を左右することが多いの。このため、周りの《狼》が食欲をなくすような戦法を取る《狼》もいるから気をつけなさい」

「はい」

「そして最後、月桂冠についてよ」

月桂冠？なんだか、凄そうな響きだな。木下さんも、なんだか、ウキウキとした顔でいるよ。そんなに月桂冠ってのは凄いのかな？

「月桂冠は半額神が太鼓判を押した本当に……本当に特別な半額弁当よ！通常の半額シールじゃなくて、店ごとに特別な半額シールが貼られるの！これを手にした者はその日、月桂冠シールの半額弁当が置かれたフィールドでの絶対的勝者となるわ！月桂冠がある日は、月桂冠を求める為に《狼》達は必死に戦うのよ！」

「木下さん！近い、近い！！分かったから、落ち着いて！」

「あ……ごめんなさい。そうね……それじゃあ、月桂冠シールを見せてあげるわ」

そう言って、木下さんは棚から、シール帳みたいな物を取り出して、テーブルの上に広げた。そこには、色取り取りの様々なシールが沢山……。どれもコレも半額と書かれたシールばかりだ……。

「これは山の中にあつたスーパーに遠征に行った時、得た月桂冠のシールよ。こっちは千葉のスーパーに遠征に行った時のシール、兎玉とか言う奴がかなりの強敵だったわ」

「……シールだけでも、こんなに種類があるんだ。それに一枚、一枚にそれだけの思い出がある……」

「ふふん、やっと月桂冠の凄さが分かった？」

……よく分かんなかったけど、それだけ月桂冠が凄いという事が分かった気がする。ともかく、僕も月桂冠を取れば、一人前ってことかな？ まあ、《狼》にもなれてない僕が言えるセリフじゃないけど。……僕って分類すると、《犬》なのかな？

「それと最後に言っておく事があるわ。私達の目的は半額弁当を狩ること。そして空腹を満たす事。主な活動理由はこの二つよ。腹の虫の加護を得るために、出来るだけ、昼ご飯は食べないことね。それと今日も半額弁当を得る為に戦うのなら、私もスーパー太丸に行くから、一緒に行く？」

「うん、一緒に行かせてもらおうよ」

「そう、それなら八時四十五分にスーパー太丸に集合よ」

そう言つて、木下さんは部室を去っていった。……僕もそろそろ教室に戻らないとヤバイな……。

そして授業が終わり、放課後もゲームをやつて時間を潰す。……そろそろ八時三十分だな。早めに行つた方がいいか。

スーパー太丸。少し早めに来たつもりだったけど、木下さんはもう来てみたいだ。僕は木下さんの隣にあるレトルトカレーを手にとって、弁当売り場を横目で見る。今日、残っているのは、ブリ照り弁当、シャケ弁当、から揚げ弁当、そして好転するダイナミックカルボナーラの四つ。まわりにいる《狼》の人数は目で見えるだけ

で軽く20人は超える。今日は競争率がかなり高いな……。

「吉井君……！賀千村半額神が出てきたわよ……！」

「ほ、ほんと！？早くないか……！？半値印証時刻は二十一時のはずなのに！」

「恐らく、今日の賀千村半額神は特殊時間だったのね……」

「と、特殊時間！？なにそれ！？」

一応、木下さんの話はメモに取っておいたけど、特殊時間なんて一文字も書かれてないぞ！？いったいどういうことなんだ！？

「特殊時間は各半額神がまれに起こす行為のことよ。例えば、孫の誕生日だから早く帰りたい、娘の食事が待ってるから早く帰りたいとか、半額神の欲望が起こす行為！ホントにまれにしかないから、説明しなかったけど、こんなに早く起きるなんて！吉井君！私はブリ照り弁当を狙うわ！吉井君はそれ以外を狙って！」

「り、了解！僕は好転するダイナミックカルボナーラを狙うよ！」

そして賀千村半額神が一枚、一枚、半額シールを貼っていくと、好転するダイナミックカルボナーラにシールを貼るのを止めた。そして懷から、木下さんが言っていた月桂冠シールを取り出し、貼り付けたら、調理室の目の前に戻っていった。そしてその顔はこちらを見て、頷くと扉を開け、調理室に入っていく。

そう、それが《狼》達の戦いの合図だった。

僕は走る、木下さんには追いつけないけど、足には少しは自信があるんだ。他の《狼》達よりは、絶対に早いはずだ！

そう思って、弁当売り場に飛び出すと早速、昨日僕を襲った筋肉隆々のオッサンが現れ、僕を殴ろうとする。だけど、そんなのは想定範囲内！僕はオッサンのストリートは木下さんより、はるかに遅い。これくらいならかわせる！僕がかわすとオッサンはバランス

を崩し、体制が崩れた。そしてオッサンの腕を掴み、無理矢理転ばせ、オッサンの頭を床に激突させる！

よし、第一関門はクリアだ！次は……やっぱりハゲのお兄さんと茶髪のお姉さんか！二人同時の僕の頭を狙った攻撃、だけど、この攻撃は利用できる！頭を伏せると、二人の攻撃は僕にかわされると同時に互いの脇腹を蹴られ、ダメージを受けていた。それに止めを刺すように僕はハゲのお兄さんの顔を殴って、気絶させて、茶髪のお姉さんの腹を一発殴って、気絶させた。

よし、これなら行ける。初の白星が月桂冠なんて僕って意外と凄くないかな？そして好転するダイナミックカルボナーラを取ろうとする。だが、それも簡単には行かなかった。僕を襲う大量のスプーン。この瞬間、間違いなく分かった。この攻撃は当たると。

「ぐああああああ！！」

「やはりお前か！吉井！」

「そ、その声は須藤君！なんで君が！」

僕の目の前にいたのは、クラスメイトの須川亮が目の前にいた。その手には、無料で貰えるプラスチックのスプーンが合計で20本握られていた。いや、僕に投げつけたスプーンも合わせると合計で30本のスプーンを手にとっていたというのか！？

「ふっ決まってるじゃないか、好転するダイナミックカルボナーラを食べるためさ」

「くっ！させるかああああ！」

一か八か！須川君に抱き着いて、好転するダイナミックカルボナーラを取ろうとする行為をやめさせる！それが失敗したっていい！せめて、好転するダイナミックカルボナーラを取る時間を少しでも送らせられれば！

「邪魔だああ！」

「離すもんかあああああ！」

スプーンの攻撃が僕の意識を少しずつ奪っていく……。だけど、それがなんだ！僕は、この空腹を好転するダイナミックカルボナーラで満たしたい！例え、この身が砕けようとも！

次の瞬間、僕は僕の目を疑ってしまった。なにせ、僕が倒したはずの筋肉隆々のオッサンとハゲのお兄さん、茶髪のお姉さんが須川君を抑えているのだから。

「坊主！とつととやれ！」

「で、でも！」

「私達の事はいいのよ。一人の《犬》が《狼》になろうとしてるなら、手助けしないわけにはいかないでしょ」

「さあ！やるんだ！ワン公！」

……ありがとう。筋肉、ハゲ、茶髪、僕は……《狼》になります！

「くううらああえええ！」

「くっ！離せ！離せえええええ！！！」

僕の右ストレートは須川君の顔面を捕らえ、須川君は2、3m先に吹き飛び、動かなくなった。

……これで勝ったのだろうか？筋肉、ハゲ、茶髪の力を借りて、須川君を倒した。だが、僕は月桂冠を手にしていいのだろうか？

だけど、次の瞬間、ハゲの蹴りが僕に当たりそうになる。勿論、僕は避けた。ハゲの蹴りは茶髪に当たり、茶髪は気絶した。

「さてと、ワン公。第2ラウンドの始まりだぜ」

「俺ら、二人に勝てるかな？」

「……………そうこなくっちゃね。よし！絶対に月桂冠を食ってやるぞ！」

そして第2ラウンドが始まった。

ハゲの右フックが僕を狙う。だけど、これならカウンター出来るはずだ。カウンターすると、ハゲの後ろにいた筋肉が僕のカウンターをカウンターしたが、ギリギリで避ける。

流石に2対1はきついか……。だからこそ、この戦いに勝利して食べる半額弁当は美味い。そしてまたくるハゲの右フック、それをカウンターすれば筋肉のカウンターが炸裂するだろう。

なら…………。

「ジャアアアアアンプ！！」

「しまった！上か！」

僕の作戦はジャンプ！空中戦に持ち込むのが、僕の作戦ではない。本当の作戦は…………。

「む、いない！？」

「これで！終わりだああああ！！」

ジャンプした振りをしてハゲと筋肉が油断したところを討つ！僕の蹴りはハゲに当たり、ハゲは筋肉を巻き込みながら、ぶっ倒れた。こ、これで完全に勝った後は好転するダイナミックカルボナーラをかうだけだ。そして僕は、好転するダイナミックカルボナーラを手取った。

そしてハーフプライサー同好会部室では、木下さんはブリ照り弁当を電子レンジで暖め、僕も二つある電子レンジの一つで、好転す

るダイナミックカルボナーラを暖めていた。

「では、いったただきまーす！」

「いただきます」

うん、やっぱり月桂冠ってことだけあって、美味しい！ホント、半額弁当がこんなに美味しなんて驚きだよ。

「それにしても、初狩りのしかも初勝利が月桂冠だなんて。おまけに、あの《銀色の紳士》^{ミスター・スプリン}を倒したなんて、驚きを隠せないわよ」

「ホント！？ 僕って意外と凄かったりして……」

「ええ、かなり凄いわ」

………え？ ポケのつもりだったんだけど……。木下さん（絶対零度の女王）が凄いていうくらいなんだから、ホントに凄いな……。……。

「ごちそうさまでした。吉井君、これを渡しとくわ」

「これは……鍵？」

「そ、鍵よ。このハーフプライサー同好会の合い鍵。いつでも自由に来なさい。それと今度から、私のことは優子って呼びなさい。戦友に苗字呼びで、しかもさん付けは私は嫌よ」

………もしかして、フラグ？ これはフラグなのか？ ……まさかね、僕にフラグが建つはずがない。これは気のせいだ。

「それじゃ、帰るわね。じゃあね、明久」

「えー！？ あ、あ、明久って！？ ということ、木し……優子！ あ、もう行っちゃったか……」

仕方ない。今日はもう帰るか……。

……優子か。……凄く……綺麗だったな。何を考えてるんだ

！僕は！……まあ、気にしたって仕方がないかな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3961y/>

バカと狼と半額弁当

2011年11月12日10時29分発行